

うどん液肥育ち 小麦収穫

「まるごと循環プロジェクト」



小麦を収穫する子どもたち＝高松市国分寺町福家

廃棄されるうどんから作った液肥を使って育てた小麦の収穫が30日、高松市内であった。循環型社会のモデルを考えようとする2012年に始まった「うどんまるごと循環プロジェクト」の一環で、7月には収穫した小麦でうどんを打つ。

プロジェクトを進めるのは産官民による「うどんまるごと循環コンソーシアム」。市内の機械メーカー「ちまた製作所」の装置で廃棄うどんやそのほかの廃棄食品を発酵させてメタンガスをつくり、ガスを燃料に発電。残った

液体を液肥にし、県産小麦「さぬきの夢2009」を栽培した。畑は、市民からの出資金を建設費の一部にあてる太陽光発電所を運営している「うさぎこやま電力合同会社」の代表社員、伊藤伸一さんが所有。出来上がった小麦を使ったうどん打ち体験は、出資者への配当のひとつにする。

この日収穫に参加した高松市の溝淵幸以さん(9)は、脱穀したばかりの小麦をかじり「甘くておいしい。おいしいうどんが出来そう」と話していた。

利用の道は 廃棄物 捨てる場は

原発ごみどこへ

処分地選定巡りシンポ

高レベル放射性廃棄物の最終処分地を選定する新しい仕組みについて、国などが説明するシンポジウム「いま改めて考えよう地層処分」が30日、高松市サンポートのかがわ国際会議場で開かれ、約230人の市民らが参加した。

原発で使った後の使用済み燃料から出る高レベル放射性廃棄物を地中に深くに埋める最終処分地の選定が難航している。このため、国は地方自治体の立候補を待つ方式から、国主導で「科学的有望地」を提示する方式に転換することを22日に閣議決定。

資源エネルギー庁の多田明弘電力・ガス事業部長は、「火山や活断層、土地の隆起など科学的観点、環境保護、土地利用状況など社会的観点から、有望地を地図上で提示することを想定している」と説明した。

配布された資料では、四国には火山がなく、活断層が少ないことが読み取れ、市民からは「(有望地の)可能性のあるところを開いて」などの意見が出た。

参加した三豊市の男性(59)は、「最終処分場は必要だと思うが、原発の再稼働ありきの説明だった。どこまで信じていいのか」と話した。